**古典学習陶冶会会員のための経済・経営講座　第3回「入るを量りて、出るを制す」**

**古典学習陶冶会会長補佐　志水達也税理士事務所所長　志水達也**

福沢諭吉（1835～1901）により西洋の会計制度が日本に紹介される百年前、近江商人・中井源左衛門は独自の帳合法、つまり会計制度をすでに考案していたことは既述しました。この制度は、後の二宮尊徳（1787～1856）や、西郷隆盛（1828～1877）にも受け継がれ、藩や国の経営に次のように生かされました。

「私の・・一家は離散し、親戚を転々としておりました。・・お給金は使わないようにし、余ったお金で田畑を買い増していったところ、知らぬ間に四町ほどになりました」、「わずか十年でそれだけになるとは・・是非秘訣を聞かせてはくれまいか」、「特別の事は何もございません。『入るを量りて出るを制す』、ただこの一つにございます。（尊徳『夜話』）」

「会計出納は、百般の事業皆是より生じ、経綸(けいりん)中の枢要なれば、慎まずばならぬ也。其の大体を申さば、入るを量りて出を制すの外に他の術数無し。（南洲『遺芳』陶冶会学びの本）」

ここで、西郷等は会計の本質を「入るを量りて出を制す」ことであると見抜いていることに気づきます。この言葉は中国の古典『礼記』に出てくるもので、国の税収を予測し、支出はその範囲内で賄えという意味です。これを学んだ西郷等は、会計は全ての活動の基本であり、国を治める要であるから、尊重しなくてはいけない。その本質は簡単だが、これ以外にうまい方法はないと教えています。そして、この秘訣は国だけでなく私企業の経営でも同じであると福沢諭吉は『学問のすすめ』で説いています。

「人生の有様は・・思いのほかに事業を遂げざるものなり。この不都合を防ぐの方便はさまざまなれども、人のあまり心づかざる一ヶ条あり。・・ゆえにいわく、商売に一大緊要なるは平日の帳合を精密にして、棚卸の期を誤らざるの一事なり。」

ここで棚卸とは損益計算のことで、福沢は注意深い損益計算が、人があまり気づいていない商売成功のコツであると言っています。以上、多くの先哲が書き残したように経営の秘訣は｢入るを量って・・｣という単純な公式にあるといえます。しかし、この秘訣はあまりに単純すぎるせいか、これを無視したり、他人任せにして不幸な結果となる経営者が繰り返し後を絶ちません。例えば、借入をするのに、事業計画書や資金繰り表を銀行員や会計事務所任せにして、理解しようともしない社長のなんと多いことか。

日本航空再生のために会長に就任した稲盛和夫氏（1932～）も経営方針を聞かれた際に、｢入るを量って・・｣である答えています。これはKDDI設立の際の「動機善なりや、私心なかりしか」と共に有名な言葉です。かのナポレオンは「兵法は最も単純なものが最良なのだ。間違うのは、難しい戦略を立て、賢く振る舞おうとするからだ」と言っています。つまり、単純な考え方をしていれば、考え方のプロセスが、自分にとっても、他人が聞いても明確になり、間違った選択をすることがないのです。私の経験からも、会計に強い経営者は商売が長続きし、会計に弱い経営者は、一時は儲かったとしても、やはり躓いてしまいます。そこで、古典学習陶冶会会員は、自社の経営を「入るを量りて出るを制す」という単純な観点＝会計の本質からチェックするクセをつけることをお薦めします。